

フランス語の再帰・非再帰形自動詞再考

井口, 容子
広島大学大学院人間社会科学研究科 : 教授

<https://doi.org/10.15017/7162050>

出版情報 : Stella. 42, pp.241-252, 2023-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



フランス語の再帰・非再帰形自動詞再考^{*)}

井 口 容 子

1. はじめに

フランス語において自他交替を示す動詞には、自動詞の形態として再帰形をとるものと、他動詞と形態的には同じ非再帰形をとるものがあることは、よく知られている¹⁾。

(1) a. Paul a brisé la fenêtre.

b. La fenêtre *s'est brisée*.

(2) a. On a fondu le plomb.

b. Le plomb *a fondu*.

自動詞用法において、再帰・非再帰のいずれの形態をとるかについては、従来 idiosyncrasique な問題とみなされることが多かったが、Rothemberg (1974) はこのような立場とは異なり、2つの形態の間の選択は事象を引き起こす原因が外的なものか、それとも内的なものであるのかということにより決定される、規則的なものであることを示した。一方、Zribi-Hertz (1987) は、Rothemberg (1974) が指摘した「外的原因 / 内的原因」の相違に加えて、「完了 / 未完了」という語彙的アスペクトにおける相違がこの区別にかかわっている、という視点を導入した。

再帰・非再帰のいずれの自動詞形態が用いられるかの決定において、この2つの要因が関与しているというのは妥当なことだと考えられる²⁾。ただ Zribi-Hertz (1987) が挙げている用例のなかには、本稿 2.2 節で示すような微妙なふるまいの相違を示し、さらなる説明を要すると思われるものが含まれている。本稿は Rappaport Hovav and Levin (2010) の提唱する「様態・結果相補性仮説」、および「程度到達動詞 degree achievement verbs」(Kennedy and Levin (2008) 等) の概念にも言及しながら、この問題のより詳細な分析を試みるものである。

2. Zribi-Hertz (1987) の分析

2.1. 完了性

Zribi-Hertz (1987) は、フランス語の使役交替にみられる再帰形自動詞と非

再帰形自動詞は、語彙的アスペクトの面で異なり、前者は完了的 (perfectif), 後者は未完了的 (imperfectif) な傾向を持つ、とする。

- (3) a. L'oiseau a mué sous l'effet du virus.
 b. *L'oiseau s'est mué sous l'effet du virus.
 (4) a. *L'oiseau a mué en un monstre à trois têtes.
 b. L'oiseau s'est mué en un monstre à trois têtes.

(以上, Zribi-Hertz 1987 : 40)

状態変化動詞 *muer* は、(3a-b) が示すように非再帰形態において用いられる。しかしながら (4) のように結果状態を表す句 «en un monstre à trois têtes» が付されて「鳥は3つの頭を持つ怪物に変身した」という意味になった場合には、非再帰形は許容されず、(4b) のように再帰形が用いられるのである。Zribi-Hertz (1987) はこれは再帰形自動詞の、完了的 (telic) な性格を示すものとする。

次の (5)-(6) についても、Zribi-Hertz (1987) は同様に説明する。

- (5) a. Le jardin a beaucoup embelli depuis l'hiver dernier.
 b. Le jardin s'est beaucoup embelli depuis l'hiver dernier.
 (6) a. *Le jardin a embelli d'une nouvelle pelouse.
 b. Le jardin s'est embelli d'une nouvelle pelouse.

(以上, Zribi-Hertz 1987 : 47)

Zribi-Hertz によると (6) において d'une nouvelle pelouse が表しているのは、変化の結果の最終状態を構成するものであり、この前置詞句を付すことによって文の持つ完了的 (telic) な性格が明確になる。この場合には (6b) の再帰形態しか許容されない。

同様の現象は、「状態変化動詞」のみならず、「移動様態動詞」においても認められる。Zribi-Hertz (1987) は *couler* (流れる) について以下の指摘をしている。

- (7) a. La cire coule.
 b. *La cire se coule.
 (8) a. La cire coule dans le moule.
 b. La cire se coule dans le moule.

(以上, Zribi-Hertz 1987 : 47)

補語なしで「蠟が流れる」という場合には、(7a-b) が示すように非再帰形の

みが許容される。これに対して「蠟が型に流れ込む」を意味する (8a-b) のように、流れ込む先の場所 (到達点) を表す句 *dans le moule* を伴い、完了的な意味を持つ場合には、再帰 / 非再帰両方の形態が可能となるという (Zribi-Hertz 1987: 47)。

2.2. 事例間にみられるパターンの相違

だが厳密に言えばこの (3)-(4), (5)-(6), (7)-(8) という3つのペアは、それぞれ微妙にパターンが異なる。*muer-se muer* においては、最終状態が明示されていない場合は非再帰形のみ、明示された場合は再帰形のみが許容されている。だが *embellir-s'embellir* の場合は、*d'une nouvelle pelouse* という句を伴っていない場合は両方の形態が許容されるが、この前置詞句を伴う場合には再帰形のみが許容される。逆に *couler-se couler* の場合は、*dans le moule* という前置詞句を伴って完了的な解釈を受ける場合は両方の形態が許容されるが、前置詞句を伴わず、未完了的に解釈される場合は非再帰形のみである。これはそれぞれの動詞の語彙意味論的特性と密接にかかわる、興味深い現象であると思われる。

以下の3節-5節においては、この3つのペアのそれぞれを詳細に分析し、再帰 / 非再帰形態を決定する要因について考察していく。

3. couler - se couler

3.1. Levin and Rappaport Hovav (1995) のリンキング規則

まず (7), (8) が示す *couler-se couler* をみてみよう (以下に再掲)。

(7) a. *La cire coule.*

b. **La cire se coule.*

(8) a. *La cire coule dans le moule.*

b. *La cire se coule dans le moule.*

(以上, Zribi-Hertz 1987: 47)

これは、上記3つのペアのうちで「完了 / 未完了」の対立による説明に最もなじむものであると考えられる。非再帰形自動詞の *couler* 「流れる」はもともと未完了的な意味を表す。しかしながら (8a) のように到達点を表す前置詞句 *dans le moule* を付加することにより、文全体で完了的な「流れ込む」の意味を表すことになる。*dans le moule* を伴わない未完了的な意味の場合は、(7b)

が示すように再帰形態は許容されない。だが到達点を表す句を付加して完了的な意味になると、(8b) が示すように再帰形自動詞も可能になる。

(9)-(10) にみられる *glisser* - *se glisser* についても同様のことが言える。

(9) a. *L'enfant a glissé.*

b. **L'enfant s'est glissé.*

c. *L'enfant s'est glissé dans le lit.*

再帰形自動詞は、到達点が前置詞句によって明示された場合に可能となる。

(10) は小説で見つけた例である。

(10) *Il déroula sa couverture, se glissa dedans, et il tomba endormi sur la prairie.*

(Halévy, D., *L'enfant et l'étoile*)

ここでも *dedans* という到達点を表す表現がみられる。

さらに Zribi-Hertz (1987) は *couler* の他動詞用法は、到達点を明示する場合にのみ可能であるとする。

(11) a. **La secousse a coulé la cire.*

b. *La secousse a coulé la cire dans le moule.*

(Zribi-Hertz 1987: 47)

同様の現象が、英語の運動様態動詞 (verb of manner of motion) にみられることを、Levin and Rappaport Hovav (1995) が指摘している (p. 111)。

(12) a. *The soldiers marched (to the tents).*

b. *The general marched the soldiers to the tents.*

c. ??*The general marched the soldiers.*

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 111)

(12b) のように、到達点を表す *to the tents* を付加した場合のみ、他動詞用法は可能となる。

ところで Levin and Rappaport Hovav (1995) は、意味的な構造と統語的な構造を結び付ける、4つの「リンキング規則 *linking rule*」を提案している。この規則により、動詞の非対格 / 非能格のステイタスは決定されるのであるが、そのうちのひとつ、「直接的原因の規則 *Immediate Cause Linking Rule*」は以下のように定式化されるものである。

(13) *Immediate Cause Linking Rule*

The argument of a verb that denotes the immediate cause of the eventuality described by that verb is its external argument.

(Levin and Rappaport Hovav 1995 : 135)

非再帰形の *couler* は, (12a) にみられる英語の自動詞 *march* と同様, Levin and Rappaport Hovav (1995) が示すリンキング規則のうち, 「直接的原因の規則 Immediate Cause Linking Rule」が機能して「非能格」として位置づけられる。「流れる」という事象は, 例文 (14) に代表されるように内的原因によって起こる事象としての解釈が優勢と思われるからである。

(14) *La Seine coule vers l'Ouest.*

(『ロベール仏和大辞典』)

一方, (8a-b) のように *dans le moule* のような到達点を表す前置詞句を伴って用いられる場合は, アスペクトの観点からいえば完了的 (telic) であり, 「方向づけられた変化の規則 Directed Change Linking Rule」が適用され, 「非対格」のステイタスを持つものとみなされる³⁾。

(15) Directed Change Linking Rule

The argument of a verb that corresponds to the entity undergoing the directed change described by that verb is its direct internal argument.

(Levin and Rappaport Hovav 1995 : 146)

Levin and Rappaport Hovav (1995) によると, Immediate Cause Linking Rule と Directed Change Linking Rule が競合する場合は, 後者の規則が優先され, 非対格のステイタスを持つことになるからである。そして (11a-b) および (12b-c) のコントラストが示すように, これらの動詞の他動詞用法は, 完了的な非対格動詞としての意味を持つ場合の自動詞用法に対応するものとしてのみ存在する。

この「到達点の明示」と「非対格性」の関連は, しばしば言及されるイタリア語の *correre* ‘走る’ における完了の助動詞選択の問題を想起させる。

(16) a. *Ugo ha corso meglio ieri.*

‘Ugo ran better yesterday.’

b. *Ugo è corso a casa.*

‘Ugo ran home.’

(Rosen 1984 : 66-67)

イタリア語の *correre* は、(16b) のように到達点を表す句を伴う場合には、完了の助動詞として *essere* が選択されるのである。

3.2. 様態・結果相補性仮説

ここで視点を少し変えて、Rappaport Hovav and Levin (2010) が提唱する「様態・結果相補性 (manner/result complementarity) 仮説」の観点からこれらの動詞を考えてみたい。この仮説によると非状態動詞 (non-stative verb) は、「様態 manner」を語彙的意味としてコード化する様態動詞 (manner verb) と、「結果 result」をコード化する結果動詞 (result verb) に二分される。様態と結果は相補的なものであり、ひとつの動詞が両方を語彙化 (lexicalize) することはない (p. 22)。たとえば英語の *sweep*, *swim* 等の動詞は様態動詞, *empty*, *enter* 等の動詞は結果動詞として分類される。

Rappaport Hovav and Levin (2010) の「様態・結果相補性仮説」は、*swim*, *enter* などの空間移動を表す動詞にかんする部分においては、Talmy (2000) の「動詞枠付 / 衛星枠付」の類型に近いところがある。だが移動動詞のみならず、*sweep*, *empty* など状態変化動詞も含めて「動的動詞 dynamic verbs」全体を射程に入れている点、及び本稿4節で見えるように「スケール」の概念を取り入れている点など、異なる点も多い。

この様態・結果相補性仮説の立場からいうと、本稿で分析しているフランス語の再帰・非再帰形態自動詞の3つのタイプのうち、*couler-se couler* のタイプは、英語の *swim* や *run* などとならんで、語彙的意味として「様態」をコード化する様態動詞であるといえる。これらの様態動詞は本来、非能格 (unergative) のステイタスを持つ。*couler* は (7a) や (14) のような文が示す様態動詞としての意味が基本であり、(7a-b) のコントラストが示すように、この意味の場合には非再帰形態しか許容されない。

一方、*dans le moule* という到達点を表す前置詞句が付された場合には、「流れ込む」という完了的な意味を有することになり、非対格 (unaccusative) の性質を帯びることになる。(8b) が示すように、この段階に至って初めて再帰形態の *se couler* が許容されることになる。なお非再帰形態の *couler* は、(8a) にみられるように到達点を伴った場合にも許容される。これは (16) で見たイタリア語の *correre* ‘走る’ が、到達点を表す前置詞句を従えた場合にはそのま

まの形態で「非対格」のステイタスに移行し、完了の助動詞として *essere* を選択することになる現象と同様である⁴⁾。

動詞の自他対応の観点から考えると、*couler - se couler* のタイプは例文 (12) における英語の *march* と同様、非能格の意味を持つ自動詞が基本である。(11 b) にみられるような他動詞としての *couler* は、到達点を表す前置詞句を従えて、非対格の意味に移行した自動詞からのみ派生され得るものであるといえる。

4. *embellir - s'embellir*

次に (5)-(6) にみられる *embellir - s'embellir* のタイプについて考えてみよう (以下に再掲)。

- (5) a. *Le jardin a beaucoup embelli depuis l'hiver dernier.*
 b. *Le jardin s'est beaucoup embelli depuis l'hiver dernier.*
- (6) a. **Le jardin a embelli d'une nouvelle pelouse.*
 b. *Le jardin s'est embelli d'une nouvelle pelouse.*

(以上, Zribi-Hertz 1987 : 47)

前節でみたように、*couler* が Rappaport Hovav and Levin (2010) のいう様態動詞 (manner verb) であるのに対して、*embellir* は「結果状態」を語根に含む⁵⁾、結果動詞 (result verb) といえる。ただし、やはり結果動詞とみなされる *arriver* などとは異なり、未完了的な意味も併せ持つ。これは *embellir* がいわゆる「程度到達動詞 degree achievement verb」であることに起因する。

Rappaport Hovav and Levin (2010) は、動的動詞 (dynamic verbs) はすべて、何らかの「変化 change」を表すものとする。ただこの「変化」に、scalar change と non-scalar change の2種が区別される。様態動詞が表すのは non-scalar change であり、結果動詞が表すのは scalar change である。scalar change は、スケール上、一定の方向 (particular direction) に進行する変化である。変化を計るスケールには two-point scale と multiple-point scale の2つのタイプがある。前者には2つの値 (value) しかない。変化前の状態から変化後の状態への移行は、瞬間的なものとして捉えられる。*arriver, se briser* はこのタイプのスケールを持つ結果動詞である。一方、multiple-point scale を持つ動詞における変化は、スケールに沿って漸次進行していく。このタイプの動詞の代表的なものが、「運動動詞」の領域においては Levin and Rappaport

Hovav (1995) が «atelic verbs of inherently directed motion» と呼んでいた *descendre* 等の動詞であり、「状態変化動詞」の領域では *chaffer*, *refroidir* 等の「程度到達動詞」である (Rappaport Hovav and Levin 2010: 28-32)。

「程度到達動詞」は、以下の (17 a-b) にみられる英語の *cool* のような動詞である。

- (17) a. The soup *cooled* in ten minutes. (TELIC)
 b. The soup *cooled* for ten minutes. (ATELIC)

(Kennedy and Levin 2008)

cool には、(17a) にみられるように「冷たい」という最終状態に至る完了的 (telic) な解釈を持つ場合と、(17b) のようにある一定の時間、相対的温度において冷え続けることを表す未完了的 (atelic) な解釈の両方がみとめられる。本稿で論じている *embellir* - *s'embellir* も、「程度到達動詞」と考えることができる。そのため「美しい」という最終状態に到達した完了的の意味を持つ場合と、相対的な程度の変化を表す未完了的な意味を表す場合がある。(5a-b) は未完了的な意味を表す場合であるといえる。

本節のはじめに述べたように、*embellir* はその語根に結果状態を含み、本来的に「結果動詞」であるといえる。したがって *couler* 等とは異なり、非再帰形態において完了的な意味を表すことができるはずである。それならばなぜ (6a) は許容されないのかということであるが、本稿では以下のように考える。Zribi-Hertz (1987) は (6a-b) における *de-PP* (*d'une nouvelle plouse*) を「結果状態」を明示するものとみなしているが、これはむしろ「原因」とみなすべきではないだろうか。たしかに「新しい芝生」は「美しくなった結果としての庭を構成する要素」でもあるのだろうが、「新しい芝生を導入することによって」美しくなった、と考えることもできる。いずれにしても、(4b) における *en un monstre à trois têtes* 及び (8a-b) における *dans le moule* が、前者は状態変化の結果状態そのもの、後者は位置的变化の結果の到達点そのものというように、最終状態 (*état final*) 全体を表しているのに対して、(6b) の場合はそれを構成する一要素が明示されているだけである。これによって (6b) においても完了性が強調され、再帰形態のみが用いられるとするのは無理があると思われる。

(6a-b) にみられる容認可能性の違いは、両形態における「未完了 / 完了」の

違いを表しているのではなくて、もうひとつの相違点である「内的原因 / 外的原因」によるものではないだろうか。再帰形自動詞形態は、Rothemberg (1974) 以来指摘されているように、「外的原因」によって生じる出来事を表す。あたかも自然発生的に事が生じたと捉えられるのではなく、「外からの作用で新しい芝生が付け加えられた」という、外因性の部分が *d'une nouvelle plouse* によって強調され、このため非再帰形態の (6a) が許容されなくなっているのではないだろうか。

一方、(5a-b) においては、*d'une nouvelle plouse* のような外から手を加えられたことを明らかにするような句は付されていない。あたかもひとりでその事態が生じたように表現する (5a) も可能であるし、具体的な原因には言及されていなくても、外から手が加えられたことを仄めかす再帰形態が用いられることにも問題はない。

5. muer - se muer

(3) a. L'oiseau a mué sous l'effet du virus.

b. *L'oiseau s'est mué sous l'effet du virus.

(4) a. *L'oiseau a mué en un monstre à trois têtes.

b. L'oiseau s'est mué en un monstre à trois têtes.

(以上, Zribi-Hertz 1987 : 40)

muer - se muer も、3 節、4 節で見たタイプとはまた違った興味深い下位クラスを形成するものと考えられる。*muer* は、*fleurir*, *pourrir* などの動詞と同様、生物において時とともに自然に生じる変化を記述する動詞である。そしてその意味において究極の内因的事象であり、「非能格的」である⁶⁾。したがって、形態的には非再帰形が基本であり、変化のプロセスに焦点を当てて記述を行う動詞である。これに対して再掲した上記 (4b) のように *en un monstre à trois têtes* のような前置詞句が付され、結果状態に特に焦点が当てられている場合には再帰形態が使用されることになる⁷⁾。

なお再帰形の *se muer* の用例としては、(4b) のように非再帰形の *muer* と同様の生物に生じる変化を記述し、その結果を強調するというもののみられるが、次の (18) のように、本来の意味から離れて一般の事物における結果状態に至る変化を、メタフォリックに表現する用例が多いように思われる。これ

は意味の拡張と考えてよいのではないか。

(18) Ses désirs se sont mués en réalités.

(『ロベール仏和大辞典』)

他動詞用法の「muer qc en qc」も、このタイプの自動詞用法に対応するものと思われる。

荒井 (1988) は (19) が非文であることから、(3a) の muer は対応する他動詞を持たず、転換動詞⁸⁾ ではないことを指摘した (p. 87)。

(19) *Le virus a mué l'oiseau.

(Zribi-Hertz 1987: 40)

時とともに生物に生じる変化を記述する非再帰形の muer が、対応する他動詞を持たないというのは、興味深いことであると思われる。

6. 結 語

以上みてきたように、「自他交替」に与る動詞といっても、様々なタイプが存在する。Zribi-Hertz (1987) は「転換動詞」として一括して扱っているが、これらは異なるものの混淆であることに留意すべきであろう。

たとえばフランス語の自他交替で論じられることの多い briser - se briser, éteindre - s'éteindre 等の、いわゆる「中立的代名動詞」とそれに対応する他動詞のペアと、本稿 3 節で詳述した他動詞としての couler と自動詞用法の couler / se couler の間にはかなりの開きがある。前者は他動詞的概念が基本であり、非対格である自動詞用法の se briser, s'éteindre も LSR (lexical semantic representation) においては他動詞用法と共通の使役構造を持つ (Levin and Rappaport Hovav 1995: 108)。これに対して後者においては、非能格の自動詞の couler が基本である。それが dans le moule のような到達点を表す前置詞句を付されることにより、「流れ込む」というアスペクト的に非対格としての意味を表すことになる。これにより再帰形態の自動詞 se couler も可能となり、(11b) にみられる対応する他動詞用法も可能となる。

ただこのような相違はあるものの、これらを通して自動詞用法の再帰 / 非再帰形態を決定する要因として、「外的原因 / 内的原因」と「完了 / 未完了」の 2 つが関与していることには変わりはない。

註

- ＊）本稿は「JSPS 科研費：課題番号 20K00572」の助成を受けた研究の一部である。
- 1）本文の（１），（２）のパターンのほかに，（i）にみられるような再帰・非再帰両方の自動詞形態を許容するものもある。
 （i）a. Pierre a cassé le verre.
 b. Le verre *a cassé*.
 c. Le verre *s'est cassé*.
 - 2）Martin and Schäfer（2014）はこのような立場とは一線を画し，再帰／非再帰の対立は，意味的な相違に対応するものではない，と主張する。これについては井口（2015）を参照されたい。
 - 3）Levin and Rappaport Hovav（1995）が提案する４つのリンキング規則には，本文で挙げた２つの規則のほか，「Existence Linking Rule」と「Default Linking Rule」が含まれる。
 - 4）Talmy（2000）の類型によると，英語やスラブ系の言語が「衛星枠付型」であるのに対して，フランス語やイタリア語などのロマンス語は，日本語と同様の「動詞枠付型」とされている。だが（8a-b）や（16b）のような文は，前置詞句によって移動の経路を表す「衛星枠付」的な構文であり，このような文がロマンス語にもみられることを示すものとして興味深い。
 - 5）Rappaport Hovav and Levin（2010）は，語根が表す *manner*, *instrument*, *result-state* などの情報を，イベントスキーマ（event schema）に組み込んだ *canonical realization rules* を示している（p. 24）。
 - 6）*fleurir*, *pourrir* 等については，井口（2015）を参照されたい。
 - 7）Doron and Labelle（2011）は自動詞（反使役動詞）として用いられた *casser* / *se casser* を例にとり，非再帰形態の *casser* を Proc-AC（process-focusing anticausative construction），再帰形態の *se casser* を Res-AC（result-focusing anticausative construction）と呼ぶ。前者は出来事の過程そのものを焦点化するのに対し，後者は出来事の結果状態を焦点化する。同様の状況が *muer* / *se muer* にもみられる。なお，Doron and Labelle（2011）は「階層的 vP-VP 構造」に基づき，統語的派生過程において「v」（little v）を導入するか否かが Proc-AC と Res-AC の相違を決定すると考えている。これについては，井口（2016）を参照されたい。
 - 8）Zribi-Hertz（1987）は，自動詞文の主語が他動詞文の目的語に相当するという形で対応する，自他両方の用法を持つ動詞を「転換動詞 *verbe à renversement*」と呼ぶ。

参考文献：

- 荒井文雄（1988）：「中立的代名動詞の派生について」，『フランス語学研究』第 22 号，日本フランス語学研究会，81-89。
- Doron, E. & M. Labelle（2011）：「An Ergative Analysis of French Valency Alternation」，

- Herschensohn, J. (ed.), *Romance Linguistics 2010*, Amsterdam : John Benjamins, 137-153.
- 井口容子 (2015) : 「フランス語の非再帰形自動詞と事象の内因性」, 『ステラ』 第 34 号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 29-37.
- 井口容子 (2016) : 「フランス語非再帰形反使役動詞の統語構造と意味」, 『ステラ』 第 35 号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 1-10.
- Kennedy, C. and B. Levin (2008) : "Measure of Change : The Adjectival Core of Degree Achievements", McNally, L. and C. Kennedy (eds), *Adjectives and Adverbs*, Oxford : Oxford University Press, 156-182.
- Levin, B. and Rappaport Hovav, M. (1995) : *Unaccusativity*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Martin, F. and F. Schäfer (2014) : "Anticausatives compete but do not differ in meaning : a French case study", *Congrès Mondial de Linguistique Française - CMLF 2014, SHS Web of Conferences*, 2485-2500 (http://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2014/05/shsconf_cmlf14_01245.pdf).
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin (2010) : "Reflections on Manner/Result Complementarity", Rappaport Hovav, M., E. Doron, I. Sichel (eds), *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure*, Oxford : Oxford University Press, 21-38.
- Rosen, C. G. (1984) : "The Interface between Semantic Roles and Initial Grammatical Relations", Perlmutter, D. M. and C. G. Rosen (eds), *Studies in Relational Grammar 2*, University of Chicago Press, Chicago, 38-77.
- Rothemberg, M (1974) : *Les verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*, La Haye : Mouton.
- Talmy, L. (2000) : *Toward a Cognitive Semantics Vol. 2 : Typology and Process in Concept Structuring*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Zribi-Hertz, A. (1987) : "La réflexivité ergative en français moderne", *Le Français Moderne* 55, 23-54.

辞書 :

大賀正喜他編 『ロベール仏和大辞典』, 小学館, 1988.

文学作品からの引用 :

Halévy, D., *L'enfant et l'étoile*, 第三書房, 1985.